

2022年6月19日 佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書8章22～26節

説教題：はっきり見えるように

今、ロシアの動向が気になることですが、ある雑誌でこんな記事を読みました。旧ソ連が崩壊して、新しい国造りを目指すロシアにとっての大きな問題は、70年も神を否定する—{人(スターリン等)を神にする}—歩みをした結果、多くの人々が本当の神を見失い、そしてその結果、「人々は、善悪が分からなくなってしまった」、「子供達は、なぜ善を行わなければならないのかが分からない」ということだそうです。新聞「プラウダ」の編集者が、アメリカからやって来たキリスト教団体の人達に向かって「どうすれば人々が隣れみの心を持つようになるのか分からない」と言ったということです。ソ連時代、彼らが「神」として崇めさせられていたスターリン—(スターリンの政治)—には「隣れみ」はありませんでした。その結果、人々は「隣れみ」が分からなくなったのです。この話は「人が何を神にするか、それによってその人自身も、またその生き方も変わってくる」ということを教えるのではないのでしょうか。

私達はイエス・キリスト—(キリストの父なる神様)—を神とします。「慈愛の神、慰めの神」を自分の神として持てるということは、本当に感謝なことです。しかし問題は「では私は、本当に神様を正しく持っているのか」、言葉を換えると「私は、神様(イエス様)が正しく見えているのか」ということです。正しく見ないと、正しい信仰生活、本当の祝福の信仰生活は、難しいのではないのでしょうか。今日の箇所は、そのことを私達に問うて来る箇所です。今日も「内容」と「適用」に分けてお話しします。

1：内容～盲人の目を癒す主イエス

イエス様がベツサイダに来られると、人々が1人の盲人を連れて来て「癒して下さい」と願いました。イエス様は、その盲人を人々の前で癒すのではなくて、村の外に連れ出され、人々に見えない所で癒しを為さるのです。目の不自由な人を癒すには、賑やかな場所より、静かな、刺激を一度に受けたくないような場所の方が良かったということもあるでしょう。それ以上に、イエス様は、人前で癒しを為し、人々がイエス様のことを、ただ「病を癒してくれる人」という見方をして、「癒し主」という意味で「救い主」に祭り上げることを避けようとしたようです。

イエスは、ご自分で彼の手をとって村外れまで連れて行き、2人きりになったところで癒しをされました。「両眼につばきをつけ」(23)、当時の人々は「つばきに癒しの力がある」と信じていましたから、盲人にイエス様の御業を受け止める心備えをさせる意味があったと思います。イエス様は尋ねます。「何か見えるか」(23)。彼は答えます。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます」(24)。彼は、人にも木にも触ったことがあったでしょう。「人の体」と「木」のイメージを持っていました。英語の「trunk」という単語は、人間の「胴体」にも「木の幹」にも使われます。似ているということです。まだはっきりとは見えませんが、ぼんやりと「trunk」が見えてきた。ところで、彼に見えた「人」とは誰でしょうか。「イエス様は人気のない所に彼を連れて行かれた、彼はイエス様と2人きりのはずだから、『人』とはイエスご自身ではなか」と言う意見があります。もしそうなら、彼の目はイエス様を見た。そしてイエス様は、彼の視力の回復を促すために、彼の目の前を歩いて見せて下さったのかも知れません。しかし、まだぼんやりしている。それでイエス様は、もう一度、彼の両眼に両手を当てて、完全に回復するまで癒しを為さいました。それによって、彼ははっきりと見えるようになるのです。しかし、癒された時、イエス様は彼に「人々のいる方には行かないように」と言われるのです。人々が、このことを通してまたイエス様を間違えて理解し、間違えて祭り上げることがないようにするためです。内容としては以上です。

2：メッセージ～主イエスを正しく見るための悔い改めと信従

この個所のポイントは、盲人の目が1回では完全に癒されずに、2回目の御業を受けて癒されていることです。どういうことかという、もし彼がイエス様を見たとしたら、1回目の癒しでは、イエス様がはっきり見えていないのです。2回目の御業を受けて、はっきり見えるようになったのです。これは、この通り起こったことだから、マルコはそのまま書いたのですが、しかしマルコは、このことを通して読者にメッセージを語っていると思います。それは、私達はイエス様の導きの御業を受けて、イエス様を信じるようになりましたが、信じてはいても、イエス様がはっきり見えていない、つまりイエス様を信じて生きるということはどういうことか、それが見えていないということがあるのではないか、ということです。私達が、イエス様の御業をさらに受けて、イエス様がはっきり見えるようになるように、マルコは、そのような願いを込めてこれを書いているのではないのでしょうか。

この個所がまず強調しているのは「イエス様が彼を村外れに連れ出された」ということです。それは、人々がイエス様のことを単に「癒し主」として見ることをしないようにするためだったと思いますが、言葉を換えると—(そして否定的な言い方をすると)—「人々はイエス様を自分に都合の良い存在という部分でだけ受け入れようとした」ということです。それは、決してイエス様の回りに集まっている人々だけのことではないのです。

この次の個所には「ペテロの信仰告白」の記事が記されています。ペテロが「あなたは、キリスト(救い主)です」(8:29)と、人間の歴史で初めて「イエス様を救い主」として告白します。「新共同訳」では「あなたは、メシアです」(8:29)となっています。ギリシャ語で「キリスト」と訳された言葉は、弟子達が話していた言葉では「メシア」です。「メシア(キリスト)」というのは、元々「油注がれた者」という意味の言葉です。イスラエルの歴史の中で、神がご自分の特別の使命を与える者—(王、大祭司、預言者)—に油を注ぐ儀式を受けさせて、神の使命に着かせたのです。ところが、イエス様が来られた頃には、その言葉が新しい意味を持つようになっていました。「イスラエルの民に—(ひいては世界に)—決定的な救いをもたらす者、そういう力ある者が必ず神から送られてくる」、それを「メシア」と呼ぶようになっていたのです。ペテロは、その意味で「メシア」と使ったのです。「マタイ福音書」によれば、その「ペテロの信仰告白」を受けて、イエス様は「わたしはこの岩—(ペテロの信仰告白)—の上にわたしの教会を建てます」(マタイ 16:18)と言われます。ペテロの一言は、教会の土台となる素晴らしい一言でした。そして、その「信仰告白」を受けて、イエス様は「ご自分のメシアとしての死と復活についての予告」をされます。「私は、国のリーダー達、宗教のリーダー達から排斥され、十字架につけられて死ぬ。そういう形で人々に救いを与える」と言われました。

ところが、素晴らしい「信仰告白」をしたペテロが「イエスをわきにお連れして、いさめ始めた」(8:32)のです。「そんなことを言ってもらっては困ります。あなたはそんな方であるはずがない。あなたには、力、権力、栄光の道を歩いてもらわなければ困る」と言ったのです。そのペテロを、イエス様は「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(8:33)と叱るのです。ペテロは、確かに信仰はあった、しかし実は、イエス様を正しく見てはいなかったのです。私達はどうでしょうか。イエス様を正しく見ているのでしょうか。そして、イエス様との正しい関係を生きているのでしょうか。これがいつも信仰者へのチャレンジなのです。私達も、しばしばイエス様をボンヤリとしか見ていない、そういう面があるのではないのでしょうか。それが故に、私達の信仰生活が、何か曖昧なものになっている面があるのではないのでしょうか。

「イエス様を正しく見る」とはどういうことでしょうか。イエス様は、「力、勝利、栄光、富…」、そういうものを人々に約束されたメシアではなかった。そうではなく、十字架に掛かることによって神の使命を果たされた方だった。なぜ、十字架に架かる必要があったのでしょうか。それは、神様の側から見れば、私達の罪の罰を身代わりに受けて下さるためだったのですが、私達の側から見れば、神の子が、救い主が、十字架で苦しむ姿—(鞭打たれ、骨を砕かれ、血を流し、ボロボロになって十字架で苦しみ抜いて下さる姿)—それが自分のためであったということが分かった時、人は

初めて心砕かれるからです。そして自分の罪を本気になって考え、悔い改めるのです。そして人は、神と和解出来るのです。神の御手の中に回復されるのです。CS ルイスは「人は神を燃料にして走るように出来ている」(CS ルイス)と言いました。本来あるべきところに回復されるのです。イエス様は、人が神に受け入れられる者になるように、人が神の御手の中に回復されるように、そのために人が自分の罪を認めて、悔い改めるように、そのために、地に降って来られたのです。それが第1のことなのです。私達は、そのことをはっきり見なければならぬのです。

あの「アメージンググレイス/おどろくばかりの」の讃美歌を作ったジョン・ニュートンは、奴隷船の船長として奴隷貿易で働いていた時に、嵐に遭いました。死ぬかも知れないという状況でした。その時、初めて、母から聞いていた神様に祈ったのです。「神様、助けて下さい」。すると心に響く神の御声がありました。「あなたを愛している、あなたを赦す、あなたを助ける」。彼は、自分が奴隷貿易に従事して、どんなに酷い生き方をして来たか良く知っていましたので、びっくりしたのです。「こんな者も赦して下さいますが、こんな者も助けて下さるのですか、神様の恵みはそんなに大きいのですか」。びっくりしたから、後に「アメージンググレイス/おどろくばかりの(恵み)」という歌を作ったのです。彼は、生涯その恵みに生かされて行くのです。私達は、神との関係が回復されること、それが全てなのです。全ての祝福の土台なのです。

今、戦争を目の前に見せられ、平和のことを考えさせられています。戦後世代の人にとって、今回の戦争ほど「人間の罪が—(身勝手な理屈が)—戦争を引き起こす」ということを具体的に見せられたことはなかつたのではないのでしょうか。清水町教会の前の牧師の吉間先生が次のように言っておられます。「神との平和なしに、地の平和はあり得ない」(吉間磯吉)。私も、本当にそうだと思います。そのこと1つをとっても、私達は生きるために神との和解、御手の中に回復されることが、まず何よりも大切なことではないかと教えられます。そしてその恵みは、私達が地上の生涯を終えた後、私達を天国に導いて行くのです。その恵みは、私達が天国の希望を持って今を生きて行けるようにするのです。

神との和解のための悔い改め、神との生き生きとした関係を窒息させないための悔い改め、そのために地に来られた主イエス、繰り返しますが、これこそ私達がイエス様の中に見なければならぬことです。

しかし、イエス様を正しく見るために、もう1つ大切なことがあります。イエス様は、続けてこう言っておられます。「だれでも…自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(8:34)。それはつまり、私達がイエス様をはっきり見えるようになるためには、イエス様に従い歩くということが大切だということではないのでしょうか。私達の霊的な祖先であるアナバプテストのリーダーだったハンス・デンクという人はこう言いました。「生活においてキリストに従うのでなければ、誰もキリストを真実に知ることはできない」(ハンス・デンク)。これは「キリストを真実に見ることはできない」と言い換えても良いと思います。イエス様に従い歩く過程で、私達はイエス様の御業—(取り扱い)—を受けて、ますますイエス様のことがはっきり見えるようになるのではないのでしょうか。

イエス様に従い歩くととは…。イエス様はもっとも大切なこととして『『あなたの神である主を愛せよ』…『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』』(マタイ 22:37~39)と言われましたが、具体的には「神様を心から信頼して生きること、隣人への愛に生きること、赦しに生きること、仕え合うこと…」、そのようにまとめることが出来るかも知れません。イエス様は、天にお帰りなる時、弟子達に「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」(マタイ 28:20)と言われました。その意味で私達は、聖書を通して、イエス様が何を教え、何を命じておられたのか、学んで行かなければならないと思いますが…。とにかくそのように歩いて行く中で、私達は、イエス様をはっきり見ることが出来るように、イエス様の取り扱いを受けて行くのではないのでしょうか。

先日、尾山令仁という先生の動画を見ていたら、先生が感慨深い話をしておられましたので、その

話を皆さんにもご紹介して、終わりたいと思います。それは「本間俊平」という方の話でした。後に「秋吉の聖人」と言われた方ですが、伝道者でもありました。本間先生は、請われて山口県の秋吉で大理石の採掘の仕事を始めますが、その現場で、刑務所から出て来た人、世間から見放された若者…、そんな人達を雇用して、厚生事業としていたのです。ある時、前科 11 犯の荒くれ者が入って来ました。この人は、相川という人で、元々警察官でしたが、11 犯の犯罪を犯すような人生に転落していたのです。この人を受け入れる時、本間先生は奥さんに言われたそうです。「今度入って来た相川は、一筋縄ではいかない。私達に大変なことが起こるかもしれないけど、いいかい」。奥さんは言われました。「私は何の取り柄もない者ですが、イエス様の十字架だけは心から信じております。もしもそれが神の御心なら、喜んでお受け致します」。ある時、さらにもう 1 人の若者が入って来て、相川という人の下に付きました。彼がまたとんでもない強情者で、相川という人は本間先生の奥さんに「奴を追い出してくれ」と何度も言いました。奥さんは「ここにいる人は、自分から出て行くのでなければ、こちらから追い出すわけにはいきません」と、言いました。「こんなに頼んでいるのに…」。相川という人は、石切りノミで奥さんに切りつけたのです。それを奥さんは、左手で受けました。そして、血の滴る左腕を右手で押さえて祈ったのです。「神様、この相川を赦して下さい…」。そこに本間先生が帰って来て、相川という人に言いました。「相川、お前が殺したいほど憎んでいたのは、この俺だろう。赦してくれ。赦してくれ。さあ、家内を医者連れて行ってくれ」。この時から、相川という人は、本当の悔い改めを経験して、真人間になって、全く違う人生を送ったそうです。本間先生ご夫妻は、鮮やかな神の御業を見たのです。そして、イエス様がますますはっきりと見えるようになったのです。

私達は、こんな凄まじい経験をしないでしょうが、申し上げたかったことは、主に従って歩む時、私達も主の御業を経験し、主をもっとはっきり見ることができるようになる、ということです。尾山先生は言われました。「信仰は、最後は経験です」。その意味でも、イエス様に従い歩くことが、私達の信仰生活を祝福するのではないのでしょうか。

私達は、イエス様を信じていても、イエス様がはっきり見えていないことがあると思うのです。地上の生涯は、イエス様をはっきり見るようになるために歩いて行く巡礼です。盲人は「すっかり直(った時に)…すべてのものがはっきり見えるようになった」(25)のです。私達はイエス様をはっきり見えるようになる時に、自分の在り方が正しく見えて来る、周りの人々とどう関われば良いのかが見えて来るのです。イエス様の姿が正しく見えて来るような信仰生活を歩みたいと願います。